

# 伊能忠敬とめぐる人ひと

1 安藤由紀子

石衛門の実家片貝家は「片貝村・長谷川平蔵御知行所」とあった。

「鬼平犯科帳」（池波正太郎著）の主役である鬼平こと長谷川平蔵が、伊能忠敬の周辺にいた。

千葉真公判の史料集「伊能忠敬書状」に、忠敬隠居前の寛政五年（一七九三年）と思われる一通の書簡がある。江戸店を任せていた長女イネの夫、盛右衛門にあてたもので、内容はこうだ。

「九日、火付盗賊改役長谷川平蔵様配下の同心方がお出でになつた。佐原村のかじ屋清兵衛が、友達に頼まれて盗品と知らずに買入れたところ、友達というのが取手在住の盗賊であつたため、共犯と疑われてしまった。清兵衛は去年婚入りしたばかりだが、家では離縁して追い出してしまった。当人不在のため母親、五人組、質屋残らずお呼び出して大変困つている。ご存じの通り、みんな律儀

者。長谷川様の内々お頼みの上、一件落着となるようお願いし下さい」（注1）

なぜ、あの「鬼平」に「内々お頼み」できる力が盛右衛門にあつたのか。不思議に思い、調べてみた。

## 御用

盛右衛門は忠敬九十九里時代の兄貴分、飯高惣兵衛という網元の甥であり、その縁で忠敬が婿にしていたことが分かった。惣兵衛が役所に出した親類書に、盛

「九十九里町誌」によれば、この辺一帯の支配はモザイクのようになつており、天領・小大名・旗本知行地・南北の江戸町奉行与力給知など、一村に様々な領主がいた。領主のほうも何力所にも小さな支配地があつて、平蔵は四百石の領地を片貝村と近くの森村に持っていた。

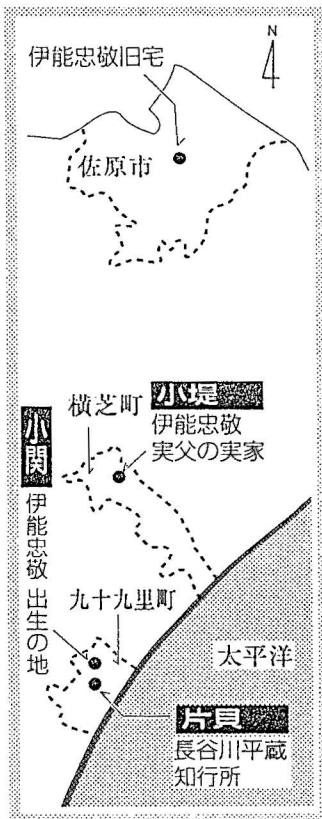
しかも蔵米取りではなく先祖代々四百石のまま、二百年間直接支配してきたので、領民と一顔の見える関係」を結んできたと言えるだろう。

領地を持つているものは、凶作の時には年貢をまけてやらなければならぬが、悪作の時にはお返しもある。名主たちからは付け届けもある。年中行事や結婚・葬式

とか、いったん事ある時は大勢駆けつけてくれる。そして、行儀見習いとしての女中奉公にも事欠かなかっただろう。

## 御用

稲川政次郎氏の「長谷川平蔵とその生涯と人足寄場」によれば、「鬼平犯科帳」にあるように、私立探偵を自費で雇うのは実



際にあつたことで、屋敷の中にお白州も半屋敷もあり、与力・同心四、五十人が出入りしていた。それだけ平蔵が経済的に恵まれていた理由の一つに、知行地が豊か

農民や町民出身であつたことを示す表現が資料にあり、領地から奉公に来た上総の女性であつた、と稲川氏は断定し、「この武家ならぬ者の血が、彼に特異な業績（注2）をあげさせたのだ」と書いておられる。

# 取りなし依頼の手紙から 浮かび上がる「血縁関係」

## 伊能忠敬年譜

延享2年 (1745)	九十九里町小畑に生まれる
宝暦12年 (1762)	伊能家の婿養子となる
天明元年 (1781)	佐原村本宿組名主となる
4年 (1784)	本宿組名主をやめ村方後見に
寛政6年 (1794)	隠居し家督を長男に譲る
7年 (1795)	江戸に出て高橋至時の子に
12年 (1800)	第1次測量（蝦夷地・奥州街道）
享和元年 (1801)	第2次測量（伊豆から陸奥など）
2年 (1802)	第3次測量（陸奥から越後など）
3年 (1803)	第4次測量（駿河から尾張など）
文化2年 (1805)	第5次測量（瀬戸内海沿道など）
5年 (1808)	第6次測量（四国など）
6年 (1809)	第7次測量（中国など）
8年 (1811)	第8次測量（九州など）
12年 (1815)	第9次、10次測量（中国など）
文政元年 (1818)	八丁堀亀島町の自宅で死去
4年 (1821)	「大日本沿海輿地全図」完成し上皇

※測量は出発年

不思議な縁で平蔵と忠敬は同年。寛政七年五月、平蔵は急死し、同じ月、忠敬は平蔵の屋敷に近い江戸・深川に隠居して、第二の人生を歩き始める。

◇ ところで忠敬の手紙が功を奏し、清兵衛一家が難を逃れたかどうか、分かっていない。

## 御用

安藤由紀子 伊能忠敬研究会編集委員。早稲田大学卒、同大学院修士課程修了。元国会図書館憲政資料室勤務。東京都出身。八千代市在住。

（注1）書簡類は筆者が現代文に訳した。以下同じ。（注2）人足寄場という進んだ更衣施設をつくった。



テレビドラマで中村吉右衛門が演じる長谷川平蔵（フジテレビ「鬼平犯科帳」から）